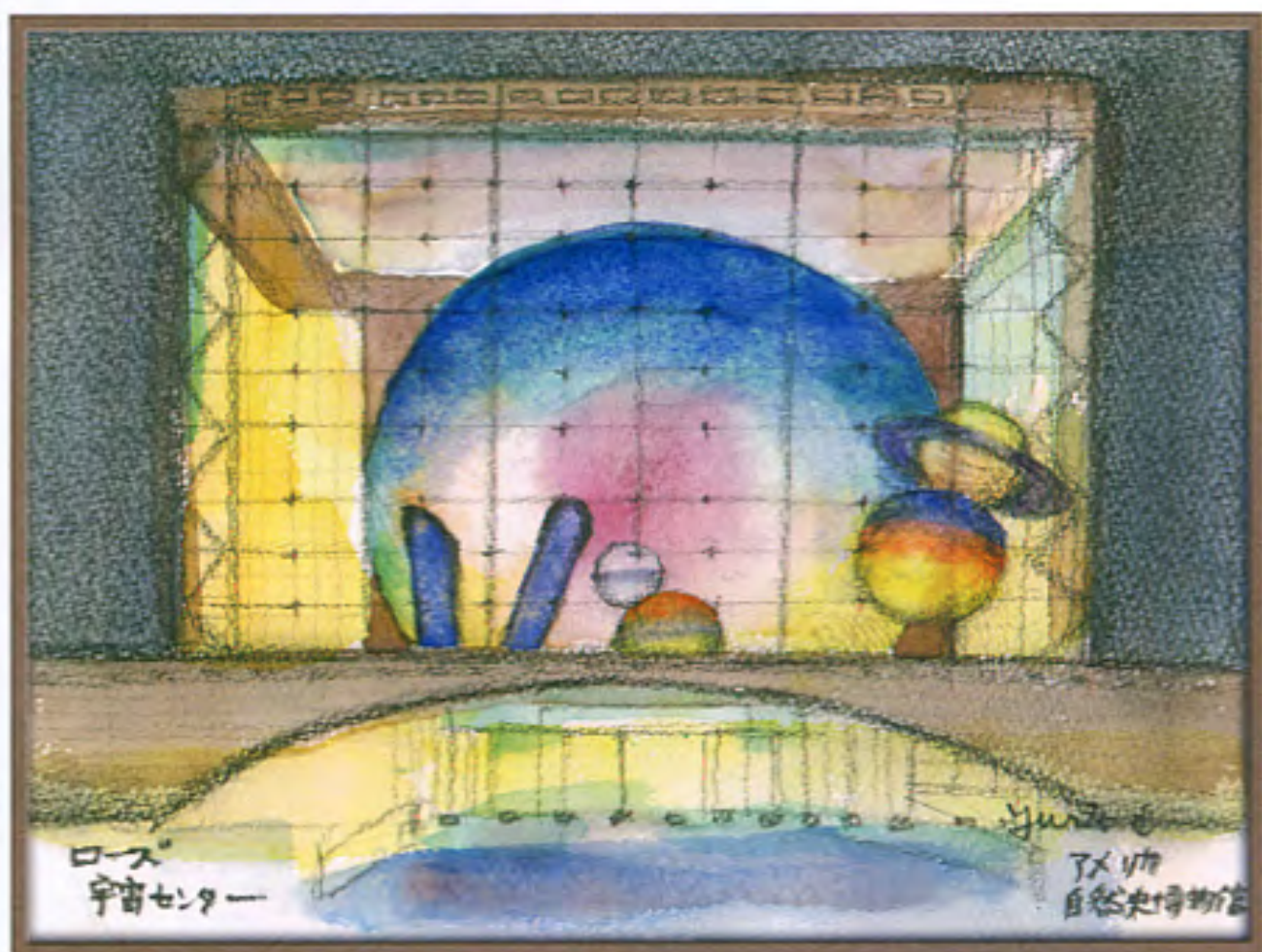


熟年俳句誌

7 2013年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(十九)

佐藤喜仙

甲斐駒を映し澄みきる代田かな

いつの鬪に水は膝まで汐干狩

蛇籠にも漣の寄せ風光る

夕闇を使ひ切るまで遠蛙

白富士の裾野を覆ふ新樹かな



山の手の抜け小路とう燕来る

石鹼玉空をくぼませ流れゆく

望郷や八十八夜の白き富士

昭和の日重機の重き音のして

外をへだつ曇硝子や春惜しむ

旅の宿に聞く明易の牛の声

大神の庭も狭しとつつじ山

かやね集

白選句集



「うまごやし」

松本周二

「武具飾る」

古川千鶴

うまごやし敷きて仰臥に空一枚

ひとひらの花卉危ふきチューリップ

春潮や一湾白く照りかへす

つくづくし古墳の裾に群れてをり

豌豆の花深川の露地に咲き

木洩れ日の燦めき踊る蝌蚪の池

天竜の川原の跳ね鯉幟

落人の里にて古りし武具飾る

接待の老鶯しきり札所寺

薄暑光水を残して山暮るる

枝先にふはりと揺るる蛇の衣

幾百の生命をつなぐ蝌蚪の紐

「初鯉」

川井素山

竹の子の重さ手にとる鍬やすめ

下町の神輿手入を囲む子等

初鯉箸の上まらぬ男の輪

古藤の百畳の棚花すだれ

佛壇の水減る速さ夏きざす

投葉減り安堵の息の五月かな

「春」

安藤虎酔

縁先の音なき音の春の雨

雨風の収まりし川花吹雪

まだ冷ゆる名のみ春の立ちにけり

金色の菜の花畑浄土めく

花衣の色とりどりに囲まれし

きびきびと三社祭の女子衆

「連休」

田島昭久

池中の木に蛇巻きて餌を狙ふ

老人が凧揚げ教ふ子供の日

蒲公英は綿毛となりて夏に入る

照り返し葉は白く見え夏に入る

ラバンダー裏木戸飾り薄暑かな

母の日のいつもの花の届きけり



撫子集

主宰選



長久保郁子

新緑やけやき並木は空狭め

万緑をふるはせ白馬いななきぬ

万緑をぬけでて高層ビル並ぶ

公苑に鴉啼きみて若葉寒

藤の花いにしへよりの色で咲く

手の平に子燕包み如何にせむ

麦の穂のうねりとなりてバスを呑む

田植機の腕の確かさ夏つばめ

三日目は言訳の付く筍飯

敷石に牛車の軋む薄暑かな

小池清司

米田文彦

朧夜の港の宿の奥深し

晩春や地酒の壺の持ち重り

住職の法話も済みて食ぶ菜飯

いつまでも動かざる亀藤揺るる

さわさわと落つる小滝や散る光

山本達人

芝桜蒼天写し色を増す

雪解水大蛇のごとく岸降るる

朝風に光あふるる春の海

いつのまに景色をかへる芽吹きかな

明るさに色あるを知る春の日の出

水ぬるむゆつくり渡る蔓の橋

岡野安雅

農道にすみれ群れ咲く青田かな

テントの中農家直売の春野菜

句碑の立つ気比神宮や卯波立つ

関ヶ原の古戦場跡麦の秋

葉桜や護岸工事の始まり

青木英林

鯉幟空のキャンバス独り占め

一番湯菖蒲葉くはへ笛にせり

筍の重きを背負ひ帰りけり

新茶開け天地の香り楽しまん



那須野集

主宰選



親離れ子離れすとや茄子植うる

池内とほる

夕暮の道を残して花散りぬ

橋本 修平

銅鐸響く大栈橋に花水木

菜の花や旅立ちの歌口遊ぶ

金色の陽を弾くごとと椎若葉

外出も俛ならぬ身や杉花粉

巡礼の補陀落望む熊野灘

駅に咲くつつじしばしの清涼剤

樟若葉透きて木洩れ陽匂ひたり

春尽きて人の賑はひ一休み

葉桜の天ひかりをり利根堤

柳田 皓一

石垣を丸ごと包む芝桜

丸山酔宵子

夏に入る草木の花も盛りなり

馬籠宿坂の水車に揺るる藤

突然に空を破るや揚雲雀

交差する雪溪長し浅間山

房総の線路光るや若葉風

よもぎ餅食べて馬籠の川涼し

コーヒーの苦み含みて夏日かな

雪溪の浅間を見上ぐる熱気球

山遊びうなじの小虫払ひけり

田中清秀

一湾を抱く火の山袋掛

小柳千美子

降り立つや燕飛び来る駅の中

葉桜に喧噪遠くなりけり

登山道崖を守れる著義の花

乱立のヘンゲル文字や町薄暑

庭先に薬の並びて春惜しむ

旬来たり駿河の鯖を夕餉とす

山藤の短き房も風にゆれ

外つ国へ娘旅立ち立夏かな

春の鴨慌てて逃ぐる汽笛かな

和田勝信

駿河湾の五月の雨の中義兄の死

長島清山

廃校の桜に響く鬼太鼓

通夜の闇浜風とほる夏座敷

突風に羽ばたく燕流されし

信濃から姪も駆け付け五月の葬

角又の荒波鎮めうねりけり

恩人の葬に出されし新茶飲む

春の海礁の白波気付きけり

慟哭が電話の向かう初夏の夜

盛りかごに曲り胡瓜のセール旗

森岡陽子

葉桜に忍びのごとく毛虫這ふ

後藤克彦

参道に薫り幽かな夏気配

ベランダで犬と添ひ寝や五月晴れ

愛犬のフードのおまけ鯉のぼり

たんぽぽの絮の飛び散り追ふ子供

甘味屋も新茶と書きて客迎へ

野仏を隠す路傍の茂る蔭

ぬか漬けの材も変はりて初の瓜

杉菜取る手先行き来の蟻一匹

撫子集・那須野集鑑賞五月号より

客員 村上克哉

撫子集

遠堤につづく春田や風渡る

米田文彦

遠くに見える土手か、ため池に続く田は春を迎え荒く鋤き返され、苗を植えるため水を張った水田や、紫雲英を一面に咲かせている田もある。やがて稲作が始まる前の静かな田に穏やかな柔らかな風が吹き渡ってくる。如何にもどかな田園風景が詠まれている。

蜆桶汽水湖の砂残りけり

長久保郁子

蜆は淡水や塩分の少ない河口等に棲む、4、5月頃が旬で黒ずんだものは泥地の産、橙色を帯びたものは砂地の産。関東地方には真蜆が多く、琵琶湖水系

の瀬田蜆、山陰は大和蜆が多い。海岸にあつて海水と淡水との中間濃度の塩分を含んだ水の穴道湖や浜名湖が汽水湖で、蜆が美味だ。蜆は水底から砂ごとすくい取るが蜆桶にその砂が浅っていた。取つたばかりの活きのいい蜆の様子がよく分かる。

恋猫のさつと横切る裏小路

小池講司

猫の恋は年に4回ほど有るが春が特に目立つ。角川春樹編の現代俳句歳時記によると「和漢三才図説」には「猫、春は牡、牝をよび、秋は牝、牡をよびてつるむ、大抵春秋二度子を産む」とある。特に早春の盛りのついた雄猫は雌を求めて昼となく夜となくさまよい歩き、飼猫が何日も家を空けることも多い。恋情を訴える独特の夜の静寂を破る物狂おしい声は不気味だ、普段は大股で我が物顔でのんびり歩いている裏小路を鋭い目つきでさつと横切つていったのは雄猫か、恋猫の生態を巧く詠んだ。

(以下略)

伝言板

1 第十九回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年7月12日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第二十回本部句会

①日時 2013年8月9日(金)

14:00~17:00

その他事項は第十九回に同じ

3 第十九回吟行(原則第四火曜日)

日時 2013年7月23日(火)

場所 清澄庭園

集合 大江戸線・半蔵門線

「清澄白川」改札出口 15時

句会場 庭園内「涼亭」

夕食 仕出し弁当・飲物を用意

出句数 嘱目2句

費用 交通費・入園料各自負担、

句会場費・飲食代均等割り
(約5000円)
その他 句会終了後「納涼会」をお
こないます。(当日は満月)

申込 喜仙宛7月20日まで
(FAX又はTEL)

4 第二十回吟行

日時 2013年8月27日(火)

場所 井の頭公園

集合 JR中央線「吉祥寺駅南口」

改札出口 11時

句会場 未定

昼食 各自用意

出句数 嘱目3句

費用 交通費各自負担。

詳細は次号にて

5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」
欄がございますので、句評、近況報告、
ご意見などご自由にお寄せください。
なお友の会の皆さんは特別作品(十
句)、随筆、その他論文等をいつでも

投稿することができます。お待ちいた
しております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」に
なれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者
は入会申し出の翌月より
12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-15

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。